〈書　評〉

ダニエル・バルカルセル『アンデスの反乱——独立の先駆者トゥパク・アマル』

（染田秀藤訳，平凡社，1985年）

I　はじめに

トゥパク・アマル (Túpac Amaru, トゥパック・アマル，1738－1781) の反乱の事実が大幅に復元されたのは1940年代のことである．その先駆的研究がカルロス・ダニエル・バルカルセルによる本書の初版 (1947年刊) である．本書は，ほぼ同時期に著わされたボレスラオ・レウィンの著書とともに古典的名著となった．以来，トゥパク・アマルやその反乱の過程を知るうえで，研究者の多くがこれらに依拠してきたのである．

1965年に刊行された本書は，スペインやペルーの古文書館にある未刊資料をふんだんに利用して，「初版」を書き改め，再構成したものである．本書が扱っている対象は，反乱の指導者であるトゥパク・アマルと，反乱そのものの経過と展開である．このなかで，カシケ (原住民共同体の首長) が反乱者側か王党派側かの二極に分裂したことが鋭く指摘されている．この点は高く評価されてよい．カシケ同士の対立・反目の原因をめぐる説明はないものの，今後，トゥパク・アマルの反乱を解明していくうえで，この対立は重要なカギを握っているように思われる．さらに，ファルファン・デ・ロス・ゴドスの反乱計画を支持した代表的な郡がティンタであった (21頁) とか，トゥパク・アマルがこれに加担していたのではないか (57頁) といった興味深い指摘もみられる．

ところで，本書は，トゥパク・アマルがペルー人の「独立」の先駆者であ

り，反乱の目的は社会正義と政治的独立の達成にあったことを明らかにしようとしている．著者もペルー人であって，かくの如き意図，目標設定にはペルー国家の真の独立を願う著者の使命感が少なからずうかがわれる．こうしたことの背景には，ペルーにおけるナショナリズムの高揚という事情がある．1968年の革新的軍事政権の成立以降，トゥパク・アマルはペルー人の革命的英雄として脚光を浴びた．この政権は，反帝国主義闘争の推進と，あらゆる階級と民族の統合をめざす政策の象徴をトゥパク・アマルに見い出したからである．この理由から，ペルーにおけるトゥパク・アマルの反乱の研究熱は，「独立」の模索と絡んで未曽有の高まりをみせてきた．バルカルセルは，この中心的存在であって，膨大な資料の刊行や著作，シンポジウムの開催等を通じて活躍してきたのである．

以下では，まず本書の構成を示し，次に，著者の意図や目標が成功しているのか否かという視点から，評者が理解しうる範囲内でいくつかの問題点を述べることにしたい．

II　本書の構成

まず本書の構成を目次によって示すと，次の如くである．

序文

年譜

第1章　18世紀のペルー

第2章　反乱の先駆け

第3章　人となりと地理的背景

第4章　遵法闘争

第5章　蜂起

第6章　反乱

第7章　カシーケ同士の対立

第8章　サンガララの勝利

第9章　南部への進撃

第10章　ミカエラ・バスティダス
第11章　武装した民衆
第12章　防衛策
第13章　聖職者の態度
第14章　クスコ包囲
第15章　反乱軍の指揮官たち
第16章　王党軍の攻撃
第17章　解放者トゥパク・アマル
第18章　背信と犠牲
第19章　新しい領袖ディエゴ・クリストバル
第20章　アルト・ペルーのトゥパク・カタリ
第21章　反乱の終局
第22章　南アメリカにおける反響
第23章　フェルナンド・トゥパク・アマル
第24章　フワン・バウティスタ・トゥパク・アマルとペルーの独立
第25章　評価
訳者あとがき　他

それでは以下，本書の要点をみていこう．第1，第2章は本書の導入部であって，ここでは18世紀ペルー副王領における社会正義の喪失と，武力闘争発生の概要が述べられる．

第3章から第18章までがいわば本題である．ここでは，トゥパク・アマルとその反乱の発生・展開が扱われる．まず，トゥパク・アマルの人物像と，反乱の発生地となったティンタ郡の歴史・地理的風土が紹介され(3章)，トゥパク・アマルの遵法闘争の展開ならびに啓蒙的知識人との接触が指摘される(4章)．次に，反乱の動機を諸階層の対立関係において検討した後，社会正義貫徹への道を選んだトゥパク・アマルの国王に対する忠誠の態度は，やがて独立志向に変わったとする(5章)．

1780年11月のコレヒドール・アリアガの逮捕と処刑によって開始された

反乱は一挙に拡大する(6章). カシケ層は王党派か反乱者側かの二極に分裂し，互いに反目しあう(7章)が，サンガララの勝利(8章)に端的に示された如く，反乱軍の勢威はいちだんと高まってゆく(9，10章). とはいえ，軍事面での障害が反乱軍にはあった. そこで，トゥパク・アマルは，人種の差を越えて「ペルー人(スペイン人，クリオーリョ，メスティソ，サンボ，インディオを区別せず，正しい意志をもつ人びと)」の統合をはかる. しかし指揮者と大衆双方の急進化によって，その統合政策は失敗に帰し，「スペインからの公然たる分離を表明するのはいまだ時期尚早である」とトゥパク・アマルは決断する(11章).

一方，サンガララの敗北を契機に王党派が反乱の鎮圧にのり出し(12章)，聖職者は反乱への対応をめぐって二極に分裂した(13章). 反乱軍はクスコを包囲・攻撃するが敗北し，撤退を余儀なくされる(14章). 次に反乱軍指揮官の功績と，王党派討伐軍の編成及び逆襲の状況を描写し(15，16章)，社会正義の追求をめざすトゥパク・アマルの思想の発展過程は，啓蒙思想の影響による「本国への忠誠主義から革命的な分離主義へ」の移行であり，この移行の時期を1781年3－4月と著者は確定する(17章). 同年4－5月，トゥパク・アマルら反乱軍の指揮者・幹部の多くは逮捕され処刑される(18章).

第19章から第24章までは，トゥパク・アマルの逮捕以後における反乱の行方や余波が述べられる. その内容は，反乱軍残党の動向と王党軍によるその鎮圧(19章)，アルトペルーの反乱(20章)，1783年7月のディエゴらの処刑による反乱の終結とペルー副王領の荒廃ぶり(21章)，南アメリカ全域における反乱や抵抗(22章)，トゥパク・アマルの末子と異母弟の末路(23，24章)からなる.

そして終章において著者は，「トゥパク・アマルの反乱は反植民地主義を訴え，自由と権利の復活を唱え，社会正義と政治的独立を目指した先駆的な運動」であり，「トゥパク・アマルはペルー人にとって社会正義を求めた先駆者であると同時に，ペルー人全体の独立を目指した先駆者」であったとの評価を下す.

III　本書の問題点

18世紀ペルーにおける民衆の搾取・収奪の機構及び反乱軍による打倒の目標について，本書では①レパルティミエント(強制配給制，6頁，8頁，39頁，45頁，51－52頁，59頁，94頁)，②貢納(租税，8頁)，③ミタ(6頁，38頁，41－42頁，51頁，58－59頁)，④アルカバラ(商品売買税，58頁，87頁)，⑤不正(官吏による国庫の詐取行為や腐敗堕落等，52頁)があげられている．しかし，これらの具体的内容やそれぞれの機構に関する説明はほとんどない．またそれらを排撃するための反乱軍の戦略についても，その言及箇所はごくわずかである．しかもコレヒドールのアリアガの逮捕と処刑(58頁，64頁)，徴税事務所やオブラへ(織物工場)・アシエンダ(大農園)の襲撃(23頁，60－61頁，121頁)といった反抗そのものが描写されているだけである．

当時のペルー副王領における民衆の二大搾取機構(①レパルティミエント制とカルロス3世の改革)に関しても，本書での扱い箇所はきわめて少ない．しかも，それらの捉え方が不正確なために，それぞれの搾取形態を本書から理解するのは難しいと言える．

まずレパルティミエント制からみていこう．これに関する著者の理解はきわめて皮相的である．例えば，この制度の法制化を著者は次のように述べている．「フェルナンド6世…は勅令を発布し，コレヒドールが…インディオの福祉と利益に資することを目的とする商業行為に公に従事するのを許可した…その斬新な方法は前途有望な制度…これによって日常生活に必要不可欠でありながらなかなか手に入れられない品物がインディオの手の届くものになった…」(6頁)と．「法制化」にいたる経過やその必然性は無視され，楽観この上なく捉えられている．この「法制化」は，対ヨーロッパ貿易と植民地市場経済の拡大――これは③(鉱山，アシエンダ，オブラへが対象)による原住民搾取をいっそう強化した――を前提とするものであって，リマの特権商人層の采配によって実現されたのであった．またこの代償として王室は，①の商品額に4％のアルカバラを課した．国庫収入(④)を増やすのが目的で

あった．だがこの点の分析はみられない．それゆえにコレヒドールによる「国庫への支払い義務」(8頁)が，このアルカバラをさすことさえ本書からは理解できない．

次にカルロス3世の改革であるが，1780年の反乱にいたるまでのそれは，行政区画の改革と自由貿易の開始，増税政策を二大骨子とする．前者は，1776年のラプラタ副王領(本書では「ブエノス・アイレス副王領」とある．4頁)の新設，ヨーロッパからの輸入品関税(④に該当)の12%から6%への引き下げ(1778年以降実施)，ブエノスアイレス及びスペイン本国における数港の貿易港としての開放をさす．これらにより，特にクスコ司教区の経済が大きな打撃を被ることになった．後者は，④の増額(1776年7月法令により副王領内で取引きされる商品のその税率を4%から6%につり上げた)と，アレッチェによる②の再編・増額(メスティソ・ムラットらの非原住民とカシケを新たに徴収の対象に加えた)をさす．

しかし，これらの分析の欠如によって，1780年初頭に副王領内の主要都市を舞台に一斉に発生したクリオーリョの主導による一連の反乱・蜂起(またはその企て)の動機やそれらの性格の重要性が見逃がされてしまった．例えば，アレキパの反乱(22－24頁)やクスコのファルファン・デ・ロス・ゴドスの「陰謀」(20－22頁)についての著者の考えは皮相的と言わざるをえない．「特定の首謀者に率いられた運動」か，それとも「名も知れない民衆が起こした運動」かの二範疇によってそれらを理解しようと奮闘しているからだ．これらは，カルロス3世の改革を契機とする非原住民主導の抵抗として捉えるべきであって，著者のそうした捉え方は無意味としか言いようがない．

このような著者の姿勢は，用語の定義をも曖昧なものにしている．例えば，「陰謀の主な目的は新税の支払いを拒否することにあった」(21頁)とか，「新税賦課」(44－45頁)といった箇所である．ここで言う「新税」とは，6%につり上げられた④(副王領内で取引きされる商品を対象とする)や，「再編」後の②をさす．また反乱の鎮圧者側がすべて「王党派」・「王党軍」と画一的に捉えられている(17頁，76－78頁，95頁)．これは納得できない．王室の立場

を代表するという意味でのいわゆる「王党派」と植民地人支配層の対立を隠蔽してしまうからだ.

反乱は広大な地域にわたり(88頁),「その目的は9万人の人びとに支持され」(94頁), クスコ包囲に参加した人々は「4万ないし6万」(122頁)と著者は言う. ところが, 反乱の社会経済的背景の説明がなされていないために, こうした数万人の民衆がなぜ蜂起に踏み切ったのかという, 民衆レベルでの抵抗の必然的諸原因や動機が本書では不明である. よってトゥパク・アマルや, 反乱そのものの経過が詳述されてはいるものの,「民衆」不在の反乱の展開となってしまった.

さらに, 読者にとっていちだんと興味のある反乱者のイデオロギー, 特に民衆のレベルでのそれもつかみにくい.「インカ」の観念が民衆の信望を得ていた(99頁)のではないかと考えられる箇所が散見される. 例えば,「17世紀中葉以来, 抵抗運動を指揮した人びと」は『インカ皇統記』から力を得たと言う(49頁). またトゥパク・アマルが「インカの偉大な過去に思いを馳せ」(59頁),「いつもインカの礼服を身につけ」(94頁),「タワンティンスユの過去への激しい憧憬の念」を抱いていた(144頁)こと, さらに彼の息子達も「インカ風の衣裳」をまとい, 民衆がトゥパク・アマルを「解放者インカ」と歓呼した(121頁)とする点である. ところが著者は, トゥパク・アマルやクリオーリョら指導者レベルでの反抗のイデオロギーを啓蒙主義にもとめている(3－5頁, 24－25頁, 37－41頁, 206頁). とすれば, この「インカ」と「啓蒙主義」との関係はいかなるものなのか. しかしこの点については言及されていない.

次に, 反乱行動についてみてみよう. まず目につくのは,「反乱運動の進展を決定づける勝利となった」(99頁)サンガララの戦い以後の反乱軍における諸勢力の動向がつかめないことである. 例えば,「さまざまな郡…から大勢のインディオたちが到着し」(81頁), 民衆の「熱狂ぶりは……急速に高揚した」(99頁)とか,「反乱運動に参加する被搾取階級の人びとの数は増加した」(206頁)とする一方で, トゥパク・アマルらの破門によって「大勢のメスティソと

インディオが反乱軍の陣営から離反することになった」(78 頁) とも述べられている．

以上からして，終章の結論は，多分に説得力を欠くものと言うことができる．例えば，この結論の核心ともいうべき「分離主義」(＝独立志向) への移行 (206－207 頁) の契機や理由さえも示されてはいない．かつて分離主義の表明を時期尚早と決断した (11 章) にも拘らず，1781 年 3 月以降になってトゥパク・アマルにそれがめばえた (17 章) と著者は突然に言うが，この転換の必然的理由を読者は理解できない．こうしてみると，著者の意図や目標が本書において成功しているとはとうてい言い難い．

次に，表現の面での齟齬や年代の誤りも目につく．例えば，カシケの資格に関して，「メスティソもスペイン人もカシーケにはなれなかった．ただし，例外的に，インディオの血を引くメスティソがカシーケの職につくことがあった」(7 頁) と述べる一方で，他の箇所では「もしカシーケが…ペニンスラールであった場合には」(9 頁) とある．年代の誤りであるが，アレッチェが巡察吏としてリマに赴任したのは「1776 年中葉」(108 頁) ではなく，正確には 1777 年 6 月である．これは単純なミスとしては片づけられない．カルロス 3 世の改革，特に「増税政策」を検討するうえでアレッチェの登場時期がカギを握るからである．また「クスコ包囲」の時期が本書では全体的に後へずれている (121－122 頁)．1780 年 12 月 28 日の時点で反乱軍は既に「クスコを見下ろす丘」に到着していたからだ．

また，誤訳も気になる．「彼の進軍は……ポトシーを占領しても終わらなかった」(89 頁) とあるが，これは「彼の進軍は……ポトシーの占領を達成することができなかった」とでも訳すべきであろう．次に地名に関してであるが，「ヤナコア」(115 頁) とは「ヤナオカ」(55 頁) の誤りであって，著者の誤記がそのまま訳されている．

最後になったが，20 年前のバルカルセルの著作を現時点で翻訳して世に問うことの今日的意味がはたしてあるのかどうか，疑問が残る[1]．本書では反乱の背景の分析がほとんどなされていないために，反乱の本質がみえないから

である．訳者も指摘されているように，1970 年代以降トゥパク・アマルの反乱研究は著しく前進し，この間に，反乱の社会経済的背景に関して，少数ではあるが斬新的かつ刺激的な著作が生み出されている．例えば，Jürgen Golte, *Repartos y rebeliones, Túpac Amaru y las contradicciones de la economía colonial*, Lima, 1980[2]．や Alfredo Moreno Cebrián, *El corregidor de indios y la economía peruana del siglo XVIII*, Madrid, 1977. である．これらは，特にレパルティミエント制と反乱の関係に着目したものであって，その構想と分析に対して高い評価が下されている．もし，こうした業績の一つでも翻訳され，紹介されておれば，それはトゥパク・アマルの反乱の解明にせまる多くの手掛りを提供してくれるものと思う．

注

(1)　トゥパク・アマルの反乱そのものをめぐる邦語文献としては，寺田和夫『インカの反乱――血ぬられたインディオの記録――』(筑摩書房，1964 年) がある．

(2)　Jürgen Golte のこの著書については，小林致広氏の書評 (『史林』64－4，1981 年，136－137 頁) がある．

真鍋周三（青山学院大学大学院修了）